様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年４月３日現在

研究種目：基盤研究（Ａ）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９２０３０２６
研究課題名（和文）グローバル化時代における「信頼感」に関する実証的国際比較研究

研究課題名（英文）A Cross-National Empirical Study of Trust in the Age of Globalization

研究代表者
佐々木　正道（SASAKI MASAMICHI）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：３０１４２３２６

研究代表者の専門分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：信頼感、意識調査、国際比較、グローバル化

１．研究計画の概要

「信頼」は、社会学において根幹をなす大変重要な研究テーマの１つである。本研究では、新たな「信頼」を生むシステムの確立に取り組む。本研究の主要な目的は（１）「信頼感」の尺度構成　（２）「信頼感」の構造に関する基礎理論の構築 ①個人の特性 ②対人関係における「信頼感」の構造の解明 ③多様な文化・社会システムにおける「信頼感」の構造の解明（３）２１世紀の国際社会における新たな「信頼」のシステム確立の指針への探索である。研究計画は次のとおりである。

上記（１）の目的を達成するため計量的分析を可能にする回答構造の統計的分析方法である一連の多次元的データ解析法、即ち「数量化理論」と「連鎖的調査方法」を用いて尺度を構成する。

上記の（２）と（３）の目的を達成するため、文部科学省統計数理研究所が１９５３年から継続してきた「日本人の国民性調査」と、１９８６ 年から数回に渡って我々が、実施してきた「７カ国国際比較調査」データの中から、「信頼感」に関する質問項目群を抽出し、これを参考に「信頼感」について、これまで調査を実施した数カ国と新たに加える国において統計的標本抽出法に基づき面接による国際比較調査を実施する。調査対象となる国の選択については我々の「日本人の国民性調査」及び「７カ国国際比較調査」の結果を勘案し、日本、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツとする。新たに加える国は東欧の国としてチェコ、アジアの中で全国規模での統計的標本が抽出できる基準を満たす台湾と、東西文化の接点としてのトルコを研究の進捗状況をみて加える。また社会学的概念として「信頼」を、「研究目的」で述べたように、個人、社会関係、そして社会システムの特性と捉え、その定義を広義に解釈する。さらに、質問項目については、ミシガン大学が長年調査に使用してきた３問と、既存の他の意識調査で使用してきたものなどを吟味し、我々が長年用いてきた価値観についての質問項目と合わせ、新たな項目を設定する。

本研究の調査を実施するためには、標本調査倫理に則った最低のサンプル数は各調査対象となる８２ 地点以上で１，５００ 人（有効回収数は１，０００ 人以上を期待）が最小限必要となる。なお、サンプルは調査対象者の民族、宗教等の差異に十分考慮するものの、それらの社会全体での位置付けがわかるように、特定の民族、宗教に焦点を絞らず全国規模でランダムに抽出する。国際比較の視点から、「信頼感」の構造を比較対象国の人々の一般的意識構造・民族・歴史・宗教・文化・教育システム等に関連づけながら解明する。

２．研究の進捗状況

平成１９年度：（１）国内外の「信頼感」に関連する既存の意識調査について、調査・資料データ及び文献の収集整理を行い、収集した調査データについては二次的分析を行った。（２）平成１９年度に実施するプリテスト調査に取り入れる質問項目を決定し、同時に現地の調査機関の選定を行った。
しかし、英・仏では、調査機関による調査費用が科研の交付額をかなり超える結果となり、本研究では調査実施を見送ることとした。
（３）プリテスト調査を、調査機関に委託して実施し、その結果を基に関連資料の整理集計を行い、本調査実施計画を作成した。
平成２０年度：　（１）前年度において、実施したプリテスト調査結果を基に、平成２０年度に実施する日・米における本調査に取り入れる質問項目を決定した。
（２）面接法による本調査が、日・米それぞれにおいて委託調査機関によって実施された。
平成２１年度:（１）面接法による本調査が、委託調査機関によって３カ国(ドイツ(MARPLAN調査社)・チェコ共和国（チェコ社会科学アカデミー）・台湾（ギャラップ調査社））で実施された。
（２)連鎖的調査分析方法に基づくデータ分析を行った。①「信頼感」に関する３カ国ならびに前年度調査実施の日･米の比較分析を行った。②５カ国の分析結果と既存の意識調査データとの比較検討を行った。
（３）今後の更なる本研究の展開に向けて東西文化の接点のトルコにおいて本テーマについてのプリテストが委託調査機関（Ipsos KMG、イスタンブール市）よって実施され、今後の本調査実施の可能性について検討を行った。
（４）５カ国の調査結果を基に新たに「信頼感」尺度を構成する等の研究成果を上げた。また、パターン分類の数量化による国の布置は、複数レベルで日本が米・独と対極をなしていることが調査結果から判明した。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)
すべての調査が予定どおり終了したことによる。

４．今後の研究の推進方策

（１）３年間の調査結果の総括を行う。
（２）「信頼感の総合的分析結果の報告書」を刊行する。（３）研究成果を、国内外の研究会・学会・専門誌等で発表する。（４）全５カ国調査データのデータ・ベーを作成し国内外で一般公開をする。

５．代表的な研究成果

〔雑誌論文〕（計　５件）
① Masamichi Sasaki, “Comparative Analysis of Social Trust among Five Nations,” *Comparative Sociology*, vol1,2011,査読有り(掲載決定済。ページ数未定)

② Ryozo Yoshino “Reconstruction of Trust on a Cultural Manifold: Sense of Trust in Longitudinal and Cross-National Surveys of National Character” *Behaviormetrika*. Vol.36, No.2, 2009, 115-147,査読有り

〔図書〕（計　４件）
① Masamichi Sasaki(edited with R. Marsh) T*rust:Cross-National Perspectives.* Leiden, The Netherlands and Boston, U.S.A.: Brill Academic Publishers, 2011.

〔学会発表〕（計　２件）
① Masamichi Sasaki, “Social Trust in Contemporary Japan,” International Institue of Sociology(IIS),2009.6.12, エレバン国立大学